

第四期全国人民代表大会をどう見るか

「毛以後」に備えた国家体制

—党の一元化指導と実務型官僚型体制の確立—

脱政治の北京の表情

編集部 中嶋先生は、全国人民代表大会が開催された一月十三日から十七日のころ、同時期に中国を訪問されたということ、まことにタイミングのよい訪中だったわけですが、まず、そのときの印象からお話いただけますか。

中嶋 私は今回は変則的かというと、真口から中国を見たわけです。モスクワ、それからモンゴルの首都ウランバートルに一週間ずつ滞在して、そこから三日間の汽車の旅でゴビの砂漠を通って、大同、張家口を経て北京に入ったんです。そのコースそ



対談

中嶋 柴田 穂
なま じま みのる
なみね おほ

(東京外国語大学助教授)

(サンケイ新聞外信部長)

のものも印象的なことがあったわけですが、けれども、モンゴルが非常に厳しかったせい、とにかく中国に入りましてある意味でははっとした感じがいたしました。国境の尻から北京までまだまだ一日半ぐらいかかるわけですが、その間もうすでに感じられていたのは中国が非常に平準化しているということでした。私は前回中国を訪れたとき、柴田さんもちょうど特派員でい

らっしゃった一九六六年の秋ですが、このときは文革の激動期、紅衛兵運動のいちばん盛んなときでして、そのときのイメージが強すぎたためか、八年ぶりの中国の変化に非常に驚いたんです。現象的なことからいえば、汽車の中で『毛沢東語録』を唱えたり、毛沢東をたたえる歌をスピーカーが流したり、あるいは最近いわれている批林批孔運動について学

習が行われているかという点、まったくそうではない。汽車で北京の近くの八達嶺あたりで夜明けになります、近郊の農村風景なんか見ても、前回来たときは壁にたくさんスローガンが書いてあったんですが、そういうものがすっかり消えて、それも明らかに消したあとが見えました。それから自動車がふえたこと、また農村で以前はほとんど見かけなかった耕耘機こつらんがあちこちに見られたこと、北京市内に入っても自転車がきれいになり、人民服がきれいになっていくことなど、八年前のイメージと変わったという点を感じました。それからモンゴルが非常に厳しかったせい、北京の市場なんかをまわってみますと、品物が多いという印象を受けました。

北京の表情は、一口にいつて、脱政治という点を感じさせます。単身の旅行でしたから、できるだけ肌で中国を知ろうと思ひましてあちこち歩いたんですが、北京にいた一週間のうち、批林批孔運動の高揚というふうな風景はまったくなかったんです。日本で『人民日報』や『紅旗』を通じて伝えられている批林批孔運動と現実の批

林批孔運動というのはいずれぶん違ふ。われわれはついつい『人民日報』などを通して批林批孔運動を見がちですが、そういう雰囲気ではまったくなかった。つまり、一般民衆の中で、ある意味での脱政治の傾向が非常に強いような気がいたしました。文革の激動が林彪事件をもたらした、その余波としての批林批孔運動ですが、中国の民衆の中で、文革というのは一過性のものであったという気持が非常に強い。むしろそれよりも生活がすこしでもよくなることに民衆の関心はあるんだという印象を受けました。これは非常に大きな変化であり、また日本で伝えられている中国のイメージとの強いギャップを感じたわけです。

そういう意味で、こんどの全人大(第四期全国人民代表大会)は、そういう雰囲気をつくった実務型官僚体制が定着したことを示していると思います。私は批林批孔運動についてのパンフレットを百種類ぐらい買ってきましたが、それらを見ると、非常に瑣末な議論、スコラ哲学的な議論が多い。どうも批林批孔運動が昨年の秋ぐらいから、当初の権力政治的性格を大きく変え

たんじやないか。その問題を考えますと、いま中国ではすべての人が毛沢東以後の時代を意識している。毛沢東以後の時代にたいする不安とある意味での危機意識が、批林批孔運動の権力主義的な動きに歯止めをかけ、そして現在の毛・周体制で行こう、もうふたたび波乱や激動が起こるのは避けたいという暗黙の含意みたいなものがある。そう意味では全人大は万全の体制を整えて開催されたのではない。たとえば全人大開催に先立って中央委員会総会を開いて鄧小平をクローズアップさせたり、きよう（一月三十日）の新開を見ますと鄧小平が総参謀長になつたらしいということが出ていますけれども、そんなことを感じたわけです。

周を中心とする実務体制の確立

編集部 柴田先生、こんどの全人大についての全般的な印象はどうでしょうか。

柴田 中嶋さんが実際に目で見たとことまったく同じです。経済重視で、毛沢東以後に備えた国家機構の整備、これはあとで詳しく話しますが、批林批孔の余波



柴田 穂氏

がもうあまり見られないというのはそのとおりだと思えますね。だいたい去年の二月ごろからおかしいなと思っただけです。つまり周恩来、あるいはそれに近い人、あるいは文化革命で一度失脚したが復活してこようとする旧幹部を攻撃することに、批林批孔運動の狙いがあったわけですけれども、そういう文革派主導型の批林批孔はどうも去年の二月ごろから風向きが変わってきていた。七月にちよつと荒れまくったんですが、これもまたすぐ収拾されるという形で、さきほど彼がいったように、もう夏ぐらいからは変質したと見ていたんですけれども、その動きの上に立って全人大が開かれたと思うんですね。批林批孔というのは

全人大を自分たちのために有利にしようという狙いをもった文革派の運動であつたんですが、そしてそれが全人大を引き延ばす大きな要因になりましたが、結局、全体として見ると、周恩来を中心とする実務体制の確立ということになり、文革派は相対的にマイナスであつたというふうには見ますね。

中嶋 この流れはせきとめられないですね。しかも、今後、開かれた世界との交流があり、それがもたらす影響は大問題ですから。

今回中国に行つたとき見ようと思つたんですが、北京図書館、科学院図書館、故宫博物館、革命博物館、歴史博物館、それから革命軍事博物館、中国美術館、民族文化宮、そういうものが依然として閉ざされていんです。これはおそらくまだまだ批林批孔運動の余波が続いていて、そうせざるをえないんだらうと思つたんです。それからこれも北京特派員が伝えてくれないからいけないんですが、北海公園、それから中国で一番景色がいいといわれる故宮、景山公園、こういうところは依然として立入禁止

なんです。そういうことはちよつと意外でした。

ですから、問題はすつかり消えてはいないわけで、そういう閉ざされた世界が依然としてある。そこへ外国人が徐々に入ってくる。いまのところ外国人はいわば完全に隔離されていますが、しかし外国人のイメージは非常に大きい影響を与えますから、それだけにそちらのほうの潮流をどうするかということが問題だという気がします。

僕は批林批孔については当初から周恩来批判というものがあつたと見ているわけです。にもかかわらず周恩来を批判しつくせなかつたのは、周恩来を失うことのもつ大きな意味を考えれば、とてもそれはできないということだと思つたんです。また批林批孔の中には、逆に毛沢東側近体制を批判するという動きもありましたが、そういういくつかのプロセスがありながら結局いまのところは落ちついた。文革派のラジカルといわれた王洪文、江青、姚文元、李德生というような人たちがまったく国家の地位を占めなかつたということに示されるように、そういう意味での流れは反潮流であ



中嶋 嶺雄氏

り、これにたいして反復権という流れが潮流でありますが、結局、復権という方向に落ちついたんじゃないかという気がします。

毛が出席しなかったことの意味

編集部 毛沢東が大会に出席しなかったということについてはどうごらんになりますか。

柴田 中央委員会総会と、それに続いて開かれた全人大に彼の名前がない。出席していたら大々的に写真が出ると思うんですけども、写真が出ていない。全人大の議長団席の写真を見ると、まん中に周恩来が坐っているけれども、毛沢東の姿は見えない。

いですね。しかし、こんどの大会に出席しなかったということ自体はそう驚くべきことではないですよ。彼はすでに現職の政治家ではないと僕は見ているんです。

すでに一昨年(一九六九年)の十全大会では、彼は会議を主催したというだけでなんの発言もしていません。六九年の九全大会には彼は開会の挨拶をし、きわめて重要な演説を行ったといわれていたんですが、その九全大会と七三年の十全大会のあいだの三年半ですでにそれだけの变化があるわけです。それから彼は林彪失脚以後、国慶節にもメーデーにも出てこない。宮廷の自分の部屋にいて外国の賓客と謁見するという、古代中国皇帝の象徴的地位に自分をおいている。あるいはおかれているのかもしれない。民衆は彼が外国人と会ったということを『人民日報』やテレビで見て、ああ毛さんはまだ健在だな、ということを知るだけになっているんですから、きわめて大衆と接触のないう最高指導者ということになります。だから今回、毛沢東が全人大に出なかったことを民衆はそう驚いていないんじゃないか。少なくとも日本人ほど驚いていないんじゃないか。

ないか。いきなりぱっと出なくなっただけじゃなくて、六九年、七一年、さらに七三年の十全大会以降というふうな段階を追ってきているわけですよ。それから『人民日報』などを見ても、十全大会以降、「中国人民の偉大なる指導者」という毛沢東への敬称はとりはらつていっています。ただ、「毛沢東主席」というふうになっていいますから、きわめて象徴的地位におさまっていると思えない。毛沢東がまだ若くて、元気がいっぱい中国のことをすべて指導しているというふうに見てきたこと自体が誤つていたと思います。

全人大に毛沢東が出席しなかったことはそういうことです。さらに、この全人大で採択された新憲法でも毛沢東個人の名前は一つもありません。これはすでに十全大会で採択した党規約が「毛沢東同志云々」という箇所は全部消しましたから、新憲法で無いのは不思議ではないんですが、昨年秋ごろ日本に新憲法草案なるものが流れてきて、あれには「毛沢東は国家元首である」という規定があった。党規約から名前をはずしているのに憲法で名前を入れるという

ことは、高齢の毛沢東が死んだらまたすぐ憲法を作らなければならないということであり、おかしいなと思っていたんですが、案の定、こんどの新憲法では毛沢東の名前は全部削られている。それから毛沢東思想の位置づけも党規約と同じように、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想というふうに三つ並列させて、毛沢東思想の絶対化を避けていますね。相対化させているという点が特徴です。だから、こんどの憲法は毛沢東憲法だという評価はちよつと無理があるという感じがします。むしろ「毛沢東以後」に備えている。

いままでは毛沢東のカリマスの権威に依存して国内統一を進めるということができただけですけれども、もう毛沢東の寿命も時間の問題であるとすれば、いつまでも毛思想、毛思想といっているだけではすまされません。毛沢東にかわる新しい権威、全国統一の新しいシンボルをつくらなければならぬ。その新しい権威、新しいシンボルは周恩来でもないし、鄧小平でもないということになりますと、やはり中国共産党の指導性をここで確立させておかなければ、

軍にたいしても、全国民にたいしても統一機能を果たせぬ。そこで必然的に党の指導性優位ということが憲法でクローズ・アップされてきたわけです。人事の上でも党の指導性をなんとか優位におこうとする苦心があちこちににじみ出ていると思うんです。だから、「毛以後」に備えるということが、党の指導性を確立しようという意願となつていくわけです。ただし、そのことは実際に党の指導が非常に強いということの意味しないというのは、またあとで話します。

「毛以後」に備えた暫定体制

中嶋 憲法は非常に苦心して考えたとも思いますね。意外に、外部世界のいろいろな批判などをすいぶん気にしてつくられたんじゃないかという気がするんですよ。もちろん基本的には「毛沢東以後」の時代をどう経過していくかということですから、

その点で、私はたまたま中国で一月十一日の夜、テレビのニュースで、毛沢東がマルタの大統領と会見しているのを見ましたが、八年前と比べて毛沢東は年とった

というのが率直な印象でした。

柴田 国連の外交官が北京でフィルムを見せてもらったら、毛沢東が外国人と会っているときにたんに衰えているということだけではなくて、毛主席はいつたいだれと会っているのがわからないような感じだったという報道が流れたことがありますね。

中嶋 そういう意味で、毛沢東は実務的な指導力はないと思うんです、ですから今回の全人大というのは、高齢化に伴う毛沢東の実務的・行政的な指導力の後退を補填すべき体制として出てきたような気がしますね。ただ、北京で感ずる毛沢東像と外で感ずる毛沢東像というのは、これまた全然違うんですね。むこうで新聞記者なんかの意見を聞きますと、北京にいる人たちは毛沢東の指導能力の低下というようなことはまったくないと信じているんですね。

柴田 日本人ですか。

中嶋 ますます毛沢東というのはたいへんな存在であつて……。

柴田 日本の中国専門家や中国担当新聞記者のほとんどがそうですよ。

中嶋 北京にいますと、『毛語録』なんか少なくなつたにしても、新聞には毛沢東はいつも出ますから、毛沢東の権威はゆるぎないという雰囲気はあると思うんですが、僕はそのへんを承知の上で、外部から飛び込んで見た感じでは、毛沢東の指導能力は明らかに老齢化に伴って低下した。ただ、そのことが毛沢東のいわばカリスマ的権威の後退につながるかどうかという点、私はかならずしもそうじゃないという印象を受けたんです。毛沢東のカリスマ性なり権威は、彼が天寿を全うするまで続くんじゃないか。そこで、実際の実務的な指導力の面においてそれに代わるべき体制をつくらうとしている。それで、毛沢東体制下の非毛沢東化という潮流が、今回いろいろな波乱があつたけれども、定着してきているというふうに僕は見るわけです。それで、毛沢東が自己批判したとかというニュースが外電で流れましたが、これは香港を出所としているニュースで、私はそこまでは疑問に思います。そういう意味では、毛沢東の権威は老齢化にもかかわらず、彼は一つのシンボルとして残っている。

ただ問題は、いま柴田さんが指摘したんですけれども、こんどの憲法が「毛沢東以後」の時代に備えるためにいくつかの配慮をしていること、それはそのとおりなんです。形の上では党の一元化指導というところが貫かれている。ですからあれを形とおり解釈すれば、党主席がすべてを握るといふ、完全な一党独裁体制が名実ともに確立したということになる。そうすると、現在の党主席は毛沢東ですが、しかしながら実際の毛沢東はいま申し上げたとおりですから、毛沢東死後の時代にいったいだれが党主席になるかということが大問題になりますね。はたしてそういうリーダーがいるかどうかという問題ですね。そういう意味では、こんどの憲法は「毛沢東以後」というか、「毛・周以後」の時代の、ここ当分の歴史的移行期における暫定的な憲法であり、暫定的な体制ではないか。ですから、実態としては「毛沢東以後」に備えて、ある種の集団指導を進めているんだけれども、形の上から見ると、党主席の権威が国家の行政面においても貫かれている。これはやっぱりかなり大きな問題が残るんじゃないかという気がするんですがね。

「指導」の実態は國務院に

柴田 たしかに、こんどの憲法は党の権威を非常に強調してはいますね。たとえば「全国人民代表大会は国家権力の最高機関である」という旧憲法にたいして、「中国共產党の指導下にある国家権力の最高機関である」というふうに、「党の指導下にある」と言葉をつけ足したわけです。また、旧憲法で「全国人民代表大会は、国家主席の指名にもとづいて國務院総理を任免する」となっているのにたいして、新憲法では「全国人民代表大会の職権は、……党中央委員会の提議に基づき國務院総理と國務院の構成人員の任免」である。それから、「党中央委員会主席が全国の武装力を統率する」。このように全人大、國務院、軍の上すべて党があるような形になっています。

問題は、それにはかなり強力な党機構がなければいけないですよ。中央委員会や政治局会議を毎日開いているわけにいかないの、どうしても常設機構が必要になる。たとえば書記局とか、宣伝部とか、統

一職線工作部とか、さらに前は国務院のいろいろな系統に見合う党の機構とか……。ところが、そのような強力な、文革前のような党の中央機構が復活したとは考えられないわけです。組織の存在もないし、組織があつたにしても、責任者が出てこない。そうすると党の指導をいくら強調しても、

いったいどこが指導するのか。結局、相對的に国務院にならざるをえないですね。

周恩来、葉劍英、鄧小平、張春橋、李先念と、これに喬冠華を入れて、五、六人のインナー・キャビネットが党も、軍も見るといふふうにして、実は党と国務院の一体化、党と軍の一体化、あわせて党、政、軍の一体化ということになる。だから全人大直前の中央委員会総会で鄧小平を党副主席に上げたのも、実は彼を副首相の筆頭におくための措置であつたということになる。

もし党の指導力が強力であるならば、党を握る人はかならずしも国務院を握らなくてもいいですよ。ところが、周恩来は一昨年の党の十全大会で政治報告をやり、こんどの全人大で政府活動報告を行った。これまでは劉少奇や林彪が党大会で政治報告をや

り、周恩来が人民代表大会で政府活動報告をやつてきたのであつて、同一人が両方の大会で報告をするということは建国以来、前例がない。ということは、たんに周恩来の指導力が大きいということだけではなくて、指導の実態が国務院にあるということだと思います。

もう一つは、こんどの周恩来の報告の中で長期経済建設構想が出ていますが、はじめてのものですね。六五年から九〇年までの二十五年間を、最初の十五年とあとの十年と、二つの段階に分け、そして今年からの十年間が、その二段階の長期計画を実現するための鍵になるという構想です。これまでは五カ年計画をいくつか積み上げるといふ考えかたはあつたけれども、二十五年とか十五年というのはない。そういう構想は、党の指導性が名実ともに確立されているとすれば、これはとつとくに十全大会とか、中央委員会総会、あるいは『人民日報』や『紅旗』において出されてなければいけないわけです。こんどの全国人民代表大会で周恩来の口からはじめて出たということは、指導の実態が国務院、周恩来にあ

るという印象をぬぐえないですね。

編集部 としますと、中国という国家を実際に動かし、指導しているのは、毛沢東でも党でもなく、周恩来および周恩来を頂点とする国務院にあるということですか。

実務体制に組み入れられた急進派

柴田 そうでしょう。ただ現在、周恩来が病気でできない分を鄧小平や張春橋、李先念がやるということですね。だから一人の人間がなんでもやれるということではな

いんだけれども、実務指導の実態は周恩来を中心とするインナー・キャビネットにあると……。中嶋 そのへん、ちょっと僕は柴田さんとニュアンスが違うかもしれません。いまおっしゃったことでは、毛沢東と周恩来とのあいだに溝がある、あるいは毛沢東が押しつけられてというニュアンスに受けとられがちですが、僕はどうもそうじゃないんじゃないかと思う。つまり、状況が平静化すればするほど実務能力をもった者が出てくる。しかも中国の今後めざすものが経済建設となれば、そうならざるをえな

批判的マスコミ
+
正論ある勇氣



ページ4部85円
1部3000円(送料共)
発行1ヶ月
タブロイド年

本誌はマスコミの偏向報道是正のための建設的、具体的な提言、激動する内外情勢に対する自由かつ公正な論陣を展開しております。正しい判断の指針として自信をもってお勧めします。

- ★本会同人(順不同)★
- 会田雄次 加瀬俊一 高坂正純 神谷不二
 - 福田恆存 村松寛 石川忠雄
 - 武藤光朗 竹山道雄 大平善雄
 - 鈴木重信 三好修 木内信胤
 - 板垣与一 藤島泰輔
 - 衛藤澤吉 坂本二郎 氣賀健三
 - 阿川弘之 村松剛 長谷川進一
 - 角田順 吉村正 久保田きぬ子

—(ご購読の希望は85円は直採本手会対見本紙の希望は85円は直採本手会対)—

会話懇人論言
東京都中央区銀座2-2-18
電話(561)4311振替東京101047

い。このことが、こんどの人民代表大会の人事にも反映されている。にもかかわらず、柴田説のように党と国家というふうにならざるを得ない。二元論的なものとしてとらえるのではなく、党が国家体制をも全部自分の中に包括してしまつた。党のもとに一元的に包括された制度の中で強いのが、行政能力をもつた実務派の人物であるということだと思ふんです。卑俗なたたえを使うと、毛沢東はビッグ・ビジネスの初代の社長、毛沢東はビッグ・社長。が周恩来、専務取締役は鄧小平、張春橋は、常務取締役、ぐらになつていふようなイメージです。柴田 だいたい同じですよ。僕は、毛と周が対立して、周が毛を蹴落として最高権

力者にならうとしているとは思わない。おそらく、こんどの大会も毛沢東がその開催に不満で出なかつたというよりは、毛沢東がよろよろと人の腕によりすがつて三千人もの大衆の前に出ることはマイナスになるから、休養していただく、ということだろふと思ふんですよ。だから、毛は、会長、なんだけれども、葉山が鎌倉にいて、毎日出勤しないで会社の大方針の哲学的構想をしていると、そういう状態なんですよ。周恩来もまた毛沢東がいなければいけないし、毛沢東の名において自分たちの政策を合理化しなければならぬので、二人はそう攻め合つてはいないという感じを受

それから党と国家の一元化も、もちろん党が優位にある。制度的にも上にあるんだけれども、ただ、いまのところは抽象概念にとどまつていて、党の指導性は実態としては國務院を通じて実現されていくという意味なんです。そういう意味での一元化ですから、二元化というふうにとられてもちよつと困るんですよ。中嶋 会長である毛沢東はもちろんですが、社長の周恩来も年齢や健康の面でかなり無理してはいますね。むしろ、社長、自身もそろそろあとのことを考えておかなければいけない時期で、だから、取締役会が将来への危機感と、そしてある意味での大同団結というふうなところに達し

たのが今回の全人大であると。

柴田 毛沢東と周恩来は対立し合っていないかもしれないけれども、問題はその下の段階ですね。//重役会//とか//部長会//あたりでは結局、文革派と実務派、穩健派と急進派の対立はやはりあると思うんですよ。だから実際の人事においては周恩来の総理、鄧小平の副首相、それから張春橋を文革派から引っぱり上げて副首相にするというふうにして、穩健派が実務指導体制を握った。それから江青女史と、康生も党副主席なんだけれども、全人大では常務委員会のほうへやられてしまった。李徳生は瀋陽へ飛ばされてどうも党副主席ではないようだ。姚文元も国家機構に入らない。毛沢東のボディガードの汪東興は大会自体に出席していない。そういう中で、いかに文革派の張春橋といえども、あの國務院の実務体制の中へ入ってきたら、文革路線を強調して穩健路線に反対するということはほとんど不可能です。そういう意味では、上海グループというか文革派の勢力はかなり分断されて、張春橋は周恩来体制に組み入れられたいというふうを考えざるをえないですね。

毛・周体制下の集団指導

編集部 いまの中国の体制を〇〇時代というふうに、一言でもって評すれば、國務院優位の時代ということになりますか。

柴田 すべてが実務優位じゃないですか。たとえば大会も以前は十日もやって、たのが五日間、発表の順番もきわめてビジネスライクで、それから國務院の機構だって半分近く減らされている。そして実務ということになる。その中でいちばん重要なのは経済ですね。だからこんどの政府活動報告でも、もつとも新味のあるのは長期経済計画である。國務院機構の中で経済部門が圧倒的部分を占める。そういう点で、すべてが実務主義優位の時代になってきているという感じがします。

編集部 さきほど「毛沢東体制下の非毛沢東化」という言葉も出ましたが、実務主義優位の時代というところをなにか条件づける必要はありませんか。権力をだれが握っているのかという観点から……。

中嶋 それは毛・周体制だと思っただけ。毛・周体制の中の周恩来時代が訪れた

ということじゃないですか。

編集部 安定性という点ではいかがでしょうか。

中嶋 毛・周体制として今回ようやく暫定的なというか、毛さんが天寿を全うするまでこの体制は続くと思いますね。

柴田 およそ人事というものはこの社会でも暫定的なんです。すでに老齡化した毛さんは実は前から暫定的な人だったと思っただけです。周恩来だってそうですよ。

それから、「毛沢東以後」ということはこれまでいわれていたけれども、「周恩来以後」ということは割合最近いわれた。去年の半ばごろ、つまり周恩来が病院に入ったり、一般公式の席に出なくなってきたからなんです。それまでの、周恩来は毛沢東のたんなる忠実な行政官にすぎないという、台湾なんかにも多い見かたを前提にすれば、「毛以後」はあっても「周以後」という言葉は出てこないはずですよ。そういう前提の上で、もし「周以後」という言葉を使うのなら、「鄧小平以後」という言葉も使わなければならなくなる。要するに、毛沢東を除いたほかの人がすべて同じような

粒だということになると、「毛・周体制」という言葉は本来出てこないはずです。毛沢東の絶対的存在ということだけでは中国を分析できないというところから、「毛・周体制」という言葉とか、「毛・周以後」という見かたが出てきたわけですね。

そうすると、老齢化に伴う指導力の低下によって毛沢東が実務指導から後退する、その穴をだれかが埋めなければならぬ。それを周恩来と他の人間がドングリの背比べのような形で集団指導を行うのか、それとも周恩来が突出した形での実務グループが指導するのかによって違う。もし前者であるなら、「毛・周体制」とか、「周以後」という言葉は使えない。ですから、毛沢東を除く指導者の中では、やはり周恩来が傑出した指導力をもっているという評価をするかしないかが、分かれ目だと思えます。

中嶋 ただね、中国というのは権力者は一人というイメージが強いですから、周恩来体制というと、毛と周が対立して周恩来がすべてを握ってしまったというような誤解が日本の中にありますね。

柴田 周恩来という人は、自分がナンバー2であることを外部に宣伝しませんね。

なにしろ、ナンバー2であることをいかに隠すかという努力が十全大会以後、出てくる。林彪だと、おれは毛主席の後継者であるとして、いつも毛・林というふうに並べて書くし、いつも毛と二人で写真をとる。

そして党の副主席も複数制じゃなくて、林彪一人を党の副主席とした。ところが周恩来は、全部その逆でしょう。毛・周なんという言葉で新聞に書かれないですよ。それから二人で写真をとらない。副主席も複数にして、周はたんなる筆頭にすぎない。だから政治局も中央委員の名簿も、毛を除いては全部字画の少ない順に並べている。こういうふうになンバー2であることを隠している。自分が毛沢東を継ぐ最高権力者なんだということは彼は考えていないと思うんです。彼の発想は非常に集団指導的な発想だと思うんです。なぜならば、もし周恩来がナンバー2であるならば、周恩来のあとをだれが継ぐかをめぐって抗争が起こる原因を作ることになるし、また周自身、老齢化していて、いつ死ぬかわからない。だ

から個人の後継者という考えかたからふつ切れたところに、周恩来体制というか周恩来時代の特徴がある。だから、周恩来体制イコール集団指導としてもかまわないと思うんですよ。ただその場合、集団指導といつても、ドングリの背比べが集まって四、五人で協議するというものではない。やっぱり周恩来を核とする集団実務体制というふうにいったほうがいいですね。

発展途上国としての現実

編集部 そういう形の指導体制の対内的というか、一般民衆にたいする指導性の問題はどうか。

中嶋 こんど私が訪中したときの印象は、民衆は非常に落ちついていて、動揺したところは見えませんでしたね。これは裏返していえば、すこしも生活を向上するということにはいかに民衆の大きい関心があるかということだろうと思うんです。その点では、周恩来の政府活動報告の中でも、「八億の人民が衣食において足りるようになった」と述べているのは、非常に大きい意義があると思うんです。そして、一般の

外国人は北京空港から北京飯店、市内の目抜き通り、それから万里の長城へ行ったりして、また北京空港へ帰ってくるわけですが、そのかぎりでは中国はたいへんな国だと思はずです。いわば国家のシンボルであるようなところはすこくりつばです。しかし、一步裏通りに入れば、まだ心がうずくような貧困が残っている、こういう断絶がある点で、まさに中国は発展途上国なんです。だから、経済的土台をすこしでも発展させなければいけないという長期経済計画を打ち出した今回の全人大の基本的な方向にたいして、民衆は共感を寄せているのではないかという気がします。そういう意味で、すこしでも前進しているという私の印象と、周恩來の「衣食足った」という発言とのあいだに矛盾はないんです。

ただ問題は、国がものすこくりつばな社会をつくっているということではなくて、そういう中にいくつ問題があるわけですね。管理された旅行の印象ですばらしいと感じる中国のイメージとは違う中国がある。しかも首都北京にさえも断絶があるわけですから、ましてや北京と地方の断絶に

ついてはいくまでもないですね。ある意味で中国はとてつもない後進性を残している。たしかに八年間の大きな変化はあるんですが、いったいそれが文革、批林批孔運動の成果であったのかどうか。八年間というのは発展途上国にとっては当然の前進だというふうにも思われるわけです。これはまだまだ結論は出せないような気がしますね。いずれにしても、とにかく改善しなければいけないことがあり余っている。今後、中国はその方向に努力するでしょうし、そのことをいちばん自覚しているのは周恩來以下の実務派官僚じゃないでしょうか。

権力と民衆、原則と実態

柴田 それと違う面から見ると同じ結論に
なると思うんですが、周恩來の政府活動報告でも、国内政治の面では依然として文化大革命の勝利と批林批孔の継続をうたっているし、これは十全大会のときもそうでした。この報告について、周恩來独特の現実主義が出ていないという評価もあります。周恩來はそんな演説の中で、文化大革命や毛沢東思想や批林批孔にケチをつけた

り、そういうことをほめかすような、そういう人ではないわけです。原則と建前のつとつた上で、つまりだけれども文句をつけれない形で、長期経済計画という、周恩來のほんとうにやりたいことを打ち出している。そういう形の演説をするのが中国人であり、周恩來ですね。

そういう意味で党の指導ということが非常に強調されながらも、それは原則ないし建前論である、実態は國務院の実務指導であらうと、さつき申しましたけれども、これを裏返していると、文革、批林批孔、かつ毛沢東思想というものは原則、建前であつて、だれも否定はしないけれども、それを唱えつつ實際政策の中で変化が出てくる。ちょうど米中接近のときもそういう議論がありました。「革命的外交の柔軟な適応である」とか、「交渉もまた闘争の一環である」という、中国の変わらない原則のほうを重視する人が多かつたけれども、それにたいして私は、変わらない原則を實際政策に移していく場合の変化のほうを重視すべきだと主張してきました。

こんどの場合も生活重視、工業化重視と

いう方向が実態として出てくると思うんですか、そのときもおそらく文革、毛思想、批林批孔というものは建前として強調し、いささかも否定されないと思う。逆にいえば、原則、建前、イデオロギーというのは、そのままはけつして社会生活、経済生活の向上にはつながらないということです。原則や建前と別のところで実生活が動いている。

だから権力と民衆の乖離があるとすれば、僕にいわせると、それは原則、イデオロギーと実態との乖離なんですね。したがっていまの中国はまさに脱文革、脱イデオロギー化、あるいは脱批林批孔といってもいいかもしれませんが、そういう方向に動

いている。しかし中国人というのは原則、建前、イデオロギーをけつして否定はしない。否定しないけれども、実生活として別の生活をやりうる、そういう民族性があるんじゃないですか。

中嶋 脱政治ですね。脱政治というのは中国民族の基本的な特性じゃないでしょうか。中国人というのはものすごく権謀術数の世界があるように見えるでしょう。現在の中国はあらゆる意味で政治が有力のように見えるでしょう。だけれども、それは上澄みというか表面である。権力者の世界はそうであっても、広範な民衆というのはまさに脱政治の状況にある。ある意味では非常にニヒルな、政治への不信感みたいなも

のを本能的に身につけている民族のような気がしますね。

日本への大きな期待

編集部 つぎに対外関係については大きな変化はあるでしょうか。

柴田 周恩来報告で、米中間係、日中間係をとくに取り上げていますし、それから周恩来が自民党の保利茂氏にたいして、日米関係が緊密化することを望んでいる旨の発言をしているんですね。この報告の発言は、中国が日本、アメリカを中心とする西側に非常に大きな期待をもっていること、の反映だと思っんですよ。これは六九年秋以降の外交政策転換の延長線上にあるんです

ひたひたと浸透してくる日共・民青。暴力闘争にエスカレートする過激派。企業内外の左翼分

子があなたの職場を狙っています。仕事と職場を愛するあなたに、ぜひ読んでほしいのです。

価360円
70円

左翼労組研究会編

株式会社 ニコン
日本インダストリアル・コンサルティング

〒101 東京都千代田区
三崎町3-3-20
(263) 5936・5160

狙われてる

恐るべき左翼労組
とその対策

が、さらにこんどは国内の長期経済計画を打ち出したことよって、内外政策とも経済優先、実務優先型の政策が確立したというふうにいえるんじゃないか。

そうすると、逆に、中国国民にプラスの効果を与えそうもないソ連は優先度としてはあまり重要でないということになりますね。だからこそ、中ソ友好というような旧憲法の項目ははずされている。いまの中国にとってはソ連との関係を有利にしたいとか、長期経済計画にソ連の経済力・技術力を導入するというような期待は非常に薄いと思いますね。

中嶋 私も柴田さんのご意見と同じですが、今回の周恩来の政府活動報告で見るかぎり、対外関係については、一口でいってさして目新しいものはなかった。あえていえば、中国の経済建設にとつては日本からの技術導入や日本のプラント輸出にかけられる期待がものすごく大きいということですね。具体的にはたとえば昨年、新日鉄と中国国務院とのあいだで契約された非常に大型の鉄鋼プラントが武漢に出来るわけですね。これは新日鉄が韓国の浦項製鉄所に作

った以上のもので、間もなく中国から実習生が来るようです。ただその場合に、外貨不足を石油で補おうとしているけれども、いまのところ中国の石油は価格が高い。一方、日本としてはかならずしも良質の石油を必要としない。つまり精製装置はすでに出来ているから、できるだけ安い石油がほしいわけです。この点でいろいろネックがまだ残っていますが、とにかく中国側は日本にたいする期待が非常に強い。

そのこととの関係で、日ソ関係への牽制ということも当然出てきます。中ソ関係はそう簡単に和解するわけはありませんが、今回の全人大で注目されることは、九全大会から十全大会に至る時期のように、中国が中ソ戦争にたいする準備をそれほど強調していないということです。具体的には、「ソ連は東を攻めると見せて西を撃とうとしている」ということを強調しているのは注目すべきことだと思います。これは当面、中ソ戦争の危機がないということを中国の指導者自身が感じていることを示唆しており、数年前とずいぶん違います。ですから中ソ関係は基本的によくはならないが、そ

うかといって、いまにも戦争かといったような逼迫した危機感があるということでもない。今回、中・ソ・モンゴル国境を通じて痛感したことは、まさにそのことでした。そういう点でも対外政策についてはほぼ予想されたとおりのものが出たという感じですね。

柴田 ソ連の軍事脅威にたいしてあまり危機感をもたなくなつたのは昨年の春ごろからですね。中ソの国境に百五十万人いたのを百万に減らし、こんどは戦争の危険をむしろヨーロッパにおいている。

それから、経済、技術の発展を長期的に考えているとすれば、文化革命における教育革命はものすごくブレイキというか、マインナスになっている。一九六六年秋に文革によつて大学が停止されて、この三、四年間に新しい社会主義大学と称する実験的なものはありますけれども、結局、六六年から昨年の卒業期までの約九年間、われわれが考える正規の理工科系の卒業生は出ていません。そのことがこの一、二年まだ続くとなれば、これは将来非常にひびいてくる。おそらく二十五五年間の長期経済建設計

画が目ざしている一九九〇年ごろに、技術、科学の空白が表面化する。そういうことも考慮に入れた経済計画だと思ふんです。そこで教育制度をなんらかの形で正常化させなければならぬが、ここが文革派の抵抗がいちばん強いところですね。これをやりうるかどうか、注目すべきです。

リアルな目で日中関係を

編集部 内外政策ともに実務優位という形で進んでいる中国にたいして日本はいかに対処していくべきか、ご意見をおうかがいしたいと思います。

中嶋 やつぱり中国の実情をできるだけリアルに見ることが基本だと思ひますね。非常に熱しやすくさめやすい、あるいは自分の主観に合わせて中国を見るような傾向が日本の中にもありますけれども、そのズレがかならずどこか出てきます。そのことが長期的な日中関係のために非常にマイナスになりますね。

柴田 中国観、中国論を再検討しなければいけないですね。米中関係と日中関係の処理のしかたは本来違う面もあるけれど

も、アメリカは実によく中国の情勢変化をつかんで外交交渉をしたと思ふんです。率直にいつて日本人の中国観の多くは誤っていた。つまりさきほどからいつているように、中国人のいう原則というのは日本人の考える原則とはかなり違ふんですよ。中国が建前、原則、イデオロギー上、いわなければいけないからいつているところだけを重視して、現実主義的な政策がどんどん進んでいるし、それにしがつてリーダーシップが変わつてきていることを日本人は認めなければならない。これはとくにマスコミに多くの責任がありますけれどもね。

もう一つは、日本から中国へ行く人は中国のことをほめるけれども、日本のよさも中国に知らせないといけない。周恩来が、「日本の農業について勉強したいけれども、日本から来る人は教えてくれない」とくに左派の人は「そうだ」といつています。だから廖承志代表団なんか派遣してきて、中国人みずからが調査研究をせざるをえない。もともと社会主義体制と自由主義体制ではもの考えかたが違い、利害が衝突するということを前提にして理解し合わない

といけないんですが、それを同文同種であるとか、隣国であるということだけで日中関係が考えられている。共産党独裁下の中国と日本との違いを理解しないで、友好的とうていできないと思ふんですよ。

もう一つは、日本の外交はこれからますますむずかしくなると思ふんですよ。ソ連と中国とどうバランスをとるか。それから政治的には北京を選択したけれども、経済的には依然として台湾が残っている。この北京にたいする政治と台湾にたいする経済をどうバランスをとつて組み合わせていくか。これは最近の三木・宮沢外交が苦悩しているように、非常にむずかしい。だけれども、これは外交にまかせるべきで、ここでマスコミが日中正常化のときのように介入して、外交に世論という名の外的圧力を加えることは非常にまずいと思ひますね。

編集部 もつと、日中平和条約の問題などについてもお話いただきかったですね。が、またいづれ機会をあらためてご所見をおうかがいしたいと思います。どうもありがとうございました。

改革者

No. 180

3 1975

改
革
者

昭和35年6月25日第三種郵便物認可 昭和50年3月1日発行(毎月1回1日発行3月号 第180号) 民主社会主義研究会誌

特集 現代日本のタブー

社会改革の新構想／石田博英、河上民雄、塚本三郎
「毛以後」に備えた国家体制／中嶋嶺雄、柴田穂



現代日本のタブー

3

民主社会主義研究会誌